

『筑紫新聞』第壹號の版式と文字に関する研究

大串，誠寿

<https://doi.org/10.15017/1470651>

出版情報：九州大学，2014，博士（芸術工学），論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 大串 誠寿

論文題名 : 『筑紫新聞』第壹號の版式と文字に関する研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、1877（明治10）年に福岡で発刊された『筑紫新聞』を分析し、同紙の版式と、使用された文字の出自を明らかにするものである。『筑紫新聞』は西南戦争に伴い創刊され、福岡の他、京都、大阪、東京において販売された報道新聞である。現在の九州地方ブロック紙『西日本新聞』の始祖であり、日本の新聞の初期形態の一典型と見なすことができる。明治初期・和装新聞の外観の審美的要素は、文字の与える印象が大部分を占める。しかし『筑紫新聞』の版制作手法や使用された文字の出自に関しては記録がなく、不明である。

研究目的として『筑紫新聞』第壹號の「版式の解明」と「文字の出自の解明」の2点を設定した。まず、印刷面の文字から木版と鑄造活字版の版式の別を簡明に判定する方法を体系化した。

同一印刷面上に現れる同一字体の文字の字形を比較して、明白な骨格・結構の差異が確認される場合、それらは同一母型から鑄造された活字ではありえず、手作業で彫刻された木版であると判断できる。この原則に基づき、コンピューターの画像で字形の異同を提示しながら論証を行う「版式判定法」を定めた。

『筑紫新聞』第壹號に出現する全ての文字にID番号をつけ、分類・集計したところ、総数は3009個であった。1字形あたりの出現個数は平仮名・変体仮名が12.77個と最多であったため、版式判定法を適用する最適な文字体系として平仮名・変体仮名を選定した。照合作業はカメラで撮影して得たjpegデータをコンピューターに取り込み、画像処理ソフト「Adobe Photoshop」を用いて行った。字形の輪郭線を抽出して重ね合わせ、字画の位置の相違や、字画の方向の相違の有無によって、字形の一致と不一致を判断した。字形の正確な一致を確認することは、微小な差異による分類を行うことと不可分であるため、照合作業は字形分類の作業となった。その結果、『筑紫新聞』第壹號に出現する平仮名・変体仮名は90字形に細分化できた。そのうち版式判定法により66字形を鑄造活字と判断できた。残る24字形はサンプル数不足から保留扱いとした。

さらに第2丁に出現する漢字について分析を行い、「版式判定法」が適用可能な34字形のうち32字形を鑄造活字と判断できた。残る2字形はサンプル数不足から保留扱いとした。

以上の結果から、確実に鑄造活字と判断できる文字だけで、第2丁本文文字の過半数（54.8%）を占め、その分布は版面の全域に及ぶことを示した。また、版式判定に伴う字形分類後も3個以上のサンプルが確保された字形は、全て鑄造活字と判断できており、印刷状態が良好であれば、鑄造活字であることを立証できる文字はさらに多くなることを指摘し、第2丁の版式は鑄造活字版であると判断した。第2丁以外の丁を観察したところ、どの丁も第2丁との間に体裁の統一性が明瞭であった。また、ここまでの分析の結果、鑄造活字と判断した文字は全ての丁に出現している点、特定の丁だけ異なる版式を用いたと想定することは不合理である点から、他の丁も第2丁と同様に鑄造活字版印刷であると判断した。

続いて『筑紫新聞』の文字の出自を明らかにするため、同時代の活字史料との照合を行った。本木昌造系活字の字形を正確に伝える史料として「諏訪神社・木彫文字」、および本木昌造系活字で印刷されたことが確実な和装本『新塾餘談・初編一～四』の印刷文字からサンプルを採取し、『筑紫新聞』の印刷文字と字形輪郭線を照合した。その結果、『筑紫新聞』と「諏訪神社・木彫文字」との間に字形が一致する20字形を確認した。また『筑紫新聞』と『新塾餘談・初編一～四』の印刷文字との間に字形が一致する21字形を確認した。上記の20字形と21字形のうち「ら」、「変体仮名・三（み）」、「変体仮名・越（を）」、「へ」の4字形は『筑紫新聞』と「諏訪神社・木彫文字」と『新塾餘談・初編一～四』の3史料に共通して出現する同一字形と判断できた。従って、『筑紫新聞』第壹號に出現する37字形に関しては、本木昌造系であることが確実と結論した。

以上の結果を総合し、『筑紫新聞』第壹號の版式は鑄造活字版であり、そのうち37字形は本木昌造系の活字を使用して印刷されたことが確実であると結論した。

本研究は、印刷物の版式を識別する手法を、汎用性のある機械的操作による判定技術として体系化した。その結果、判定実施者の経験の程度によらず、単独の印刷物から版式判定することを可能にした。また「諏方神社・木彫文字」には木活字説もあり、種字であることの立証が求められてきたが、印刷物の字形との一致を示す画像を提示することにより種字説を補強した。